ISSN 1341-4844

広島県立歴史博物館

研究紀要

第24号

今中丹後「御中老格控」からみる広島藩重職の書状贈答料紙 ‥‥ 石川良枝 1

闘茶について―闘茶札と文献資料から探るその具体像― ‥‥‥‥‥‥ 石橋健太郎 24

資料紹介―塩竈神社奉納額について― ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 伊藤大輔 51

「菅茶山」の姓名・号について―茶山・晋師・太中― ‥‥‥‥‥‥‥‥ 岡野将士 59

吉川興経の引退と毛利元春の家督相続 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 木村信幸 67

研究ノート　文化年間初頭に地方に伝わった北方図について～「松前えそ図」と
「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」を事例に～ ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 久下実 85

「山陽先生詩稿」訳注（一） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 花本哲志 99

広島県立歴史博物館所蔵の雲華上人の書簡―翻刻と解題―
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 湯谷祐三　廣森美枝子 121

福山市津之郷町出土の廃和光寺塔址出土遺物について ‥‥‥‥‥‥ 尾崎光伸 (1)

令和3年

ISSN 1341-4844

BULLETIN
Of
the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY

Vol.24

2021

Artifacts Excavated from the Ruins of the Abandoned Wako-ji Temple Pagoda in Tsunogo-cho, Fukuyama City ····· OZAKI Mitsunobu (1)

Mapping papers used in formal correspondence, traced from Onchūrōkaku-hikae ····· ISHIKAWA Yoshie 1

"Toucha" —Search of the concrete image to begin with a tea competition cards— ····· ISHIBASHI Kentarou 24

About "SIOGAMA shrine exvoto" ····· ITOU Daisuke 51

About the name of "KAN Chazan" and pen name—Chazan Tokinori and Tachu— ····· OKONO Masashi 59

About the inheritance of Kikkawa family by "MOURI Motoharu" and the retirement of "KIKKAWA Okitsune" ····· KIMURA Nobuyuki 67

Two maps of HOKKAIDO spread to local area in Japan in early BUNKA-period (approximately 1804-1808) ····· KUGE Minoru 85

Sanyou-Sensei-Si-Kou;translation and annotation;part1 ····· HANAMOTO Satoshi 99

The letters of Priest Unge in the collection of the Hiroshima Prefectural Museum of History ····· YUTANI Yuuzou, HIROMORI Mieko 121

「山陽先生詩稿」訳注（一）

花本　哲志

はじめに

「山陽先生詩稿」は、江戸時代後期に広島藩儒として活躍した頼春水（一七四六～一八一六）に始まる広島頼家に伝来したものである。広島頼家伝来資料は、頼春水が広島藩から拝領した袋町の屋敷地のあるあたりがかつて杉ノ木小路と呼ばれたことに因み、杉ノ木資料と総称される。概数は九千点に及び、日常生活の中でしたためられた書簡や日記、家計に係る帳簿類、いずれも能書家として知られた頼家の人々の遺墨や詩文の草稿類、交遊のあった学者文人から贈られた書画類、公務に関する文書・記録類や、多種多様な典籍類、日常生活で用いられた器物類など、内容は多岐にわたるが、頼山陽自筆の資料は決して多くはない。寛政九年（一七九七）の江戸遊学に際し、広島から江戸までの絵入りの道中日記である「東行手記巻」や江戸から広島の実家に宛てた書簡の断簡、脱藩騒動による幽閉中に認めた口上覚や自らの宿志を表明した「幽居中の陳情」などが存在するだけで、京都に出て一家を成してから母梅颸に宛てた書簡などは残っていない。詩文の稿本がいくつか伝わっているものの、いずれも写本である。今回紹介する資料も外題に「山陽先生詩稿」とあるように、山陽の詩稿を筆写したものである。筆者は、広島頼家においては山陽の長男聿庵（一八〇一～一八五六）によるものと伝えられてきたが、聿庵の子・誠軒（一八三〇～一八九四）の可能性もあり、定かではない。

頼山陽の詩集としては、生前に唯一刊行された『日本楽府』や没後に刊行された『山陽詩鈔』『山陽遺稿　詩』があるが、そこに収録されていない詩も多い。未収録の詩は、遺墨や稿本を典拠として『頼山陽全書　詩集』（以下、『全書　詩集』という）に収録されている。本資料も『全書詩集』を編集する際の典拠となったものと考えられる。

頼山陽の詩集に訳注を加えたものは決して多くはなく、『頼山陽詩集』（伊藤靄谿著　書藝界　一九八五年・『山陽詩鈔新釋』と『山陽遺稿詩新釋』の二冊本）、『頼山陽詩集』（安藤英男著　近藤出版社　一九八二年）、『江戸詩人選集８　頼山陽　梁川星巌』（入谷仙介著　岩波書店　一九九〇年）、『頼山陽詩選』（揖斐高著　岩波文庫　二〇一二年）、『頼山陽のことば』（長尾直茂著　斯文会　二〇一七年）などがあるが、いずれも『山陽詩鈔』や『山陽遺稿詩』に収録された詩の訳注であり、未収録の詩（『全書　詩集』には収録されている詩）について訳注を加えた例は皆無に等しく、わずかに西遊稿（『山陽詩鈔』巻三・四）の初稿にあたる「西遊詩巻」を取り上げた『西遊詩巻―頼山陽の九州漫遊』（谷口匡著　法藏館　二

〇二〇年）があるくらいである。

ここで取り上げる「山陽先生詩稿」は、刊本に収録されていない詩が大半を占めている。しかも京都に出る前の、広島時代に作詩されたものであることから、頼山陽の伝記や詩を研究するうえで基礎資料となるものといえる。筆者が浅学の身を顧みず、訳注を加えようとするのもそれ故である。

本稿の作成にあたっては、原詩の漢字は旧字体を用い、俗字・略字になっているものも正字に改め、訓読の漢字は通行の字体を用いた。訓読の送り仮名は現代仮名遣いとした。翻刻にあたっては、推敲過程がわかるよう、原本に忠実に表記するようにし、訓読についても修正前の原案がわかるように併記している。訳文ならびに語釈については、谷口匡氏（京都教育大学教授）に御教示をいただいた。ここに深甚なる謝意を表したい。

一　資料の概要

本資料の形態は袋綴装大和綴で、縦二四・五センチ、横一六・五センチ、本文五十三丁で、共紙表紙である。第二丁表に朱文方印「頼氏必正楼」一顆が捺されている。批正は朱書・墨書によるもので、これにより推敲の過程を辿ることができる。欄外には墨書による注記や朱書による評語が記されており、原本を忠実に筆写したものと考えられる。

本資料には、二百十一題、二百六十二首の詩が収録されている。さらに巻末には「皥々居記」が収録されているが、これは『頼山陽全書　文集』収録の初案である。詩は、寛政五年（一七九三）の「書感」（「癸丑歳偶作」の初案）から文化八年（一八一一）の廉塾（備後神辺の儒者看茶山の塾）滞在時代までの、山陽前半生の広島時代に作詩されたものであり、山陽青年期の詩作を知るうえで貴重な資料といえる。『山陽詩鈔』冒頭の「癸丑歳偶作」の原作とされる「書感」の前に寛政九・十年（一七九七・九八）の詩が収録されるなど、前半は必ずしも時系列になっていない。また、幽閉中であった享和三年（一八〇三）から文化二年（一八〇五）にかけての作も、年代が前後しているものが見受けられる。これは筆写の際に生じたものであろう。字句の修正箇所もそのまま筆写されており、推敲過程を知ることができる。

本資料に収録された内容は、以下のとおりである（括弧内の年代は『頼山陽全書　詩集』による）。

1　擬古（未詳）　2　紀遊五首（五首）（寛政九年）　3　詠古五首（五首）（寛政九年）　4　一谷歌（寛政九年）　5　湊川歌（寛政九年）　6　筑海行（寛政十年）　7　醍醐行（寛政十年）　8　鹹塚行（二首）（寛政十年）　9　書感（寛政五年）　10　甲寅元日（寛政六年）　11　咏梅（寛政五年）　12　舟暁（寛政五年）　13　舟歸廣島（寛政五年）　14　明妃（寛政五年）　15　暑日遊照蓮寺（寛政五年）　16　石州路上（寛政八年）　17　甑坂（寛政八年）　18　夜坐（寛政八年）　19　青楼曲（文化二年）　20　東遊路上（寛政九年）　21　山崎（寛政九年）　22　美濃（寛政九年）　23　望岳（寛政九年）　24　題黄安仙人図（享和三年か）　25　閨情倣陸渭南（享和三年）　26　雨歌（享和三年）　27　江戸所見（寛

政九年か。『全書　詩集』は寛政六年とする）　28　赴竹原舟中作二首（二首・文化二年）　29　奉盈楼陪飲菅先生及家君席上分得眼字二十二韻（文化二年）　30　甲子楼即目（文化三年）　31　江上二首（二首・文化三年）　32　三月甲子楼集分得山字（文化三年）　33　靚斎集分得相字六言律體（文化三年）　34　以西嶺雲霞色満堂為首句賦一律壽嶺霞堂主翁八十（文化三年）　35　丁卯孟春木村氏招飲分韻得遇（文化四年）　36　丁卯書事（文化四年）　37　城門失火謝龍山師（文化四年）　38　仲春泛舟港口時羽隅君千強将之浪華得人字（文化四年）　39　常照庵集有竹筍之供戯賦呈主人（文化四年）　40　訪靚斎（文化四年）　41　丁卯正月十三日集松石亭分得枝字（文化四年）　42　春尽集松石亭（文化四年）　43　或贈京醞名鴨川者（文化四年）　44　家王父廿五回忌辰家翁会寒賦詩（文化四年）　45　懐仲父大人在九州（文化四年）　46　題黄山谷図（文化四年）　47　午庵晩集（文化四年）　48　問三谷達夫（文化四年）　49　抱素堂集分得五言古体蒸韻（文化四年）　50　題熊谷蓮生倒騎馬図（文化四年）　51　書自著外史新策二書後（文化三年）　52　出遊（文化四年）　53　題画山水（文化四年）　54　江都中秋（未詳）　55　篤老招飲（文化四年）　56　夜行（文化四年）　57　越後人来索詩（文化四年）　58　上黒瀑山寺（文化四年）　59　竹原陪飲三老題屏風諸葛武侯図（文化四年）　60　龍山会題玉蘊女史画牡丹（文化四年）　61　山行（文化四年）　62　澹寧居集有懐故獅絃上人分李傾過廬五日居詩一聯同賦余珠以其十四字安句頭賦此（文化四年九月廿五日）　63　村上氏招飲見獅絃詩于壁間依韻賦呈（文化四年九月二十八日）　64　玉浦女玉蘊画松樹卒賦題之（文化四年）　65　十月望松廬小集得江字（文化四年）　66　長府文学臼杵君太仲見訪且示茶山翁詩依韻卒賦（文化四年十月十八日）　67　至日松廬集杏翁静斎将役江戸梧亭将役大坂（文化四年十一月廿四日）　68　侍飲佐々君于廬分得韻家（文化四年）　69　松廬集分得韻文（文化四年三月）　70　和家翁歳首韻（文化五年元日）　71　人日午庵例会用廬同韻（文化五年一月七日）　72　立春抱素堂集（文化五年正月九日）　73　游柞村過渡部氏和杏翁韻（文化五年）　74　公駕出蒐憩于春風館家君有詩依韻賦此次叙窃喜之意（未詳）　75　豊前僧大含来訪云将上京出其郷画工所画伯牙鐘期図乞題走筆頭之（文化五年四月八日）　76　聞午庵翁避暑東山有此寄（文化五年）　77　題慈仙画（文化五年）　78　慈仙寓藤井氏玫瑰園余往訪焉観其所蔵亨保諸家真跡（文化五年）　79　奉寄茶山先生用家翁韻（文化五年）　80　贈善画紀伯挙（文化五年）　81　和三原本荘子遊妙正寺韻（文化五年）　82　題玉蘊所画蜀三傑図（文化五年）　83　玄金精舎集有懐故友人金子熊介分得韻青、坐間偶覩杜甫悼鄭虔詩亦為青韻因歩其押（文化六年）　84　訪慈仙時慈仙将東帰（文化六年十月上旬）　85　寄題挹翠園（文化六年）　86　題美人図（文化六年）　87　和武元景文韻却寄（文化六年）　88　景文至自厳島和其韻（未詳）　89　赤馬関人廣江殿峯贈銅印其自刻云（文化六年）　90　贈医生某、某妙於眼科（文化六年）　91　題玉蘊画山水（文化六年）　92　題二妓人図（文化六年）　93　題画妓（文化六年）　94　再餞岡田子亭（文化六年）　95　画山水（文化六年）　96　慈仙師自厳島再来本府（文化六年）　97　送平島生帰筑（文化六年）　98　題諧歌七部集後（文化六年）　99　題画亀（未詳）　100　題画鶴（文化七年）　101　題画蘭（文化七年）　102　画山水（未詳）　103　武侯衷甲図（未詳）　104　明妃（未詳）

105 赴備後途上十絶（十首）（文化六年十二月廿七・八・九日） 106 始寓廉塾上菅茶山翁二首（二首）（文化七年） 107 渡部伯髙至（文化七年） 108 似伯高（文化七年） 109 題山侯櫻花図（文化七年） 110 讀鄭延平伝（文化七年） 111 調迂村（文化七年） 112 出門（文化七年） 113 黄葉城墟（文化七年） 114 国分寺（文化七年） 115 丁池（文化七年） 116 送人遠遊（文化七年） 117 荒驛（文化七年） 118 楽府二首（鮮卑児・賀六渾）（文化七年） 119 豊後館萬里見過其明備中小寺子和来同賦（文化七年） 120 本荘生之京内山生帰筑同日而発賦此分贈（文化七年） 121 謝恵甫（文化七年一月） 122 謝永野生（文化七年） 123 答岡田子亨（文化七年三月十八日） 124 観梅栄谷（文化七年） 125 春閨怨（文化七年） 126 薔薇（文化七年） 127 三日上翠嶺（文化七年三月三日） 128 片雲師之京出画竹索詩卒賦之（文化七年） 129 寄題龍谷（文化七年） 130 題芙蓉石応意戒法師需（文化七年） 131 竹枝詞（文化七年） 132 贈土屋子潤（文化七年三月十八日） 133 為子潤題梅花棲鳥図、図係同人作（文化七年） 134 武元君立到（文化七年） 135 太田大幹東役来過賦謝（文化七年） 136 春日客懐十首（文化七年） 137 因肥前草場捿芳寄古賀溥卿（文化七年） 138 長崎徳見如懐至云登々庵近以眼医得財買妾因戯贈（文化七年） 139 送本荘生遊京聯句（文化七年） 140 送栗田伯彦歴詣観音大士聯句（文化七年） 141 福山国老内藤氏招飲分韻得微（文化七年） 142 宴罷宿岡氏書斎夢遊尾路（文化七年） 143 鈴木教授至欲観我外史（文化七年） 144 題社日図（文化七年） 145 宮詞二首（二首）（文化七年） 146 壽浪華奥村翁六十（未詳） 147 題慈仙山水（文化七年） 148 淡路人半仙乞詩、戯賦贈（文化七年） 149 六月晦菅波氏招飲（文化七年六月晦日） 150 七夕（文化七年） 151 新塾荷花（文化七年） 152 題観月図（文化七年） 153 七月十五夕（二首）（文化七年） 154 謝叢亭山人恵明墨、墨写群馬図（文化七年） 155 聞杏坪大人賜第京口門外、賦奉謝（文化七年） 156 四睡図（文化七年） 157 林逋図（文化七年） 158 中秋無月（文化七年） 159 赴今津玩事路上所見（文化七年） 160 宿高橋生書斎（文化七年） 161 謝高橋庸次（文化七年） 162 帰途所見（文化七年） 163 題李白酔図（文化七年） 164 題鬣蟹図（文化七年） 165 題赤馬関図（文化七年） 166 庚午中秋環碧亭従菅先生及福山国老以下、同賦得元（文化七年） 167 薬師寺賞月席上得成二十韻（文化七年） 168 送杏翁帰途（文化七年） 169 奉別杏坪大人（文化七年） 170 弟鼎請余箚記沿路名勝（文化七年八月三十日） 171 逢村田君来過（文化七年） 172 送恵甫帰覲（文化七年） 173 九日登高得山字（文化七年九月九日） 174 十三夜陪飲于長尾寺因寺名懐故古第六及焉（文化七年九月十三日）） 175 白巌氏招飲分得村字（文化七年） 176 戯贈歌者士徳（文化七年） 177 寄嚴洲佐伯士幹（文化七年） 178 即事（文化七年） 179 余聞登々庵蓄妾寄詩調之、書到漠無所対因更寄焉（文化七年） 180 与石原柳庵同賦得帖字（未詳） 181 十二月二日夜（文化七年十月二日） 182 読項羽紀（文化七年） 183 廉塾四首（四首）（文化七年） 184 題円山応瑞胡枝花（文化七年） 185 烽火台詞寄亀井元鳳（二首）（文化七年） 186 鍾馗（文化七年） 187 又錦幄（文化七年） 188 飯罷（文化七年） 189 和大含師韻都寄（文化七年） 190 謝藤井士晦恵蔫、蔫係丹産（文化七年） 200 小寺子和至同賦得明字（文化七年） 201 朱舜水祠堂歌（文化七年） 202 書懐十

首（十首）（文化七年）　203　和茶山老先生除日韻（文化七年）　204　再和其元日韻七首（七首）（文化八年）　205　送河合翁赴江戸（文化八年）　206　封梅花寄家（文化八年）　207　客至（未詳）　208　輓岡元齢翁（文化八年）　209　壽石井翁、翁善笛（文化八年）　210　松風館即事（二首）（文化八年）

211　詠史十二首（十二首）（文化四年・文化十一年の識語あり）

212　皥々居記

以上、収録された詩は、全二百十一題・二六二首に及ぶ。気の遠くなるような話ではあるが、順次訳注をまとめ、発表していきたいと考えている。

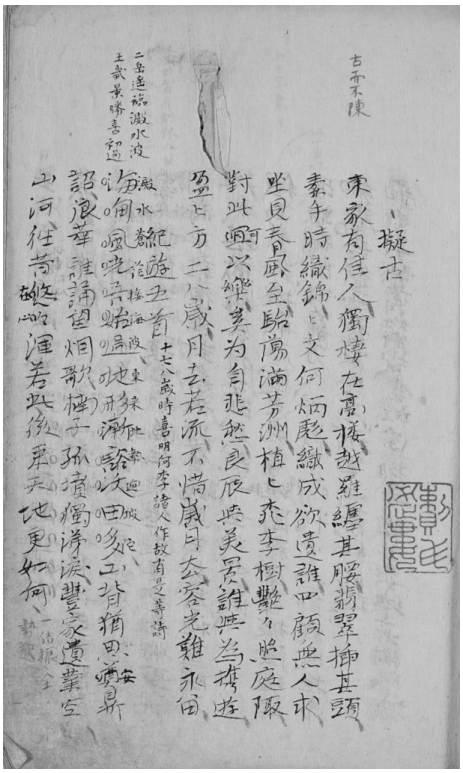

図１　「山陽先生詩稿」（冒頭）

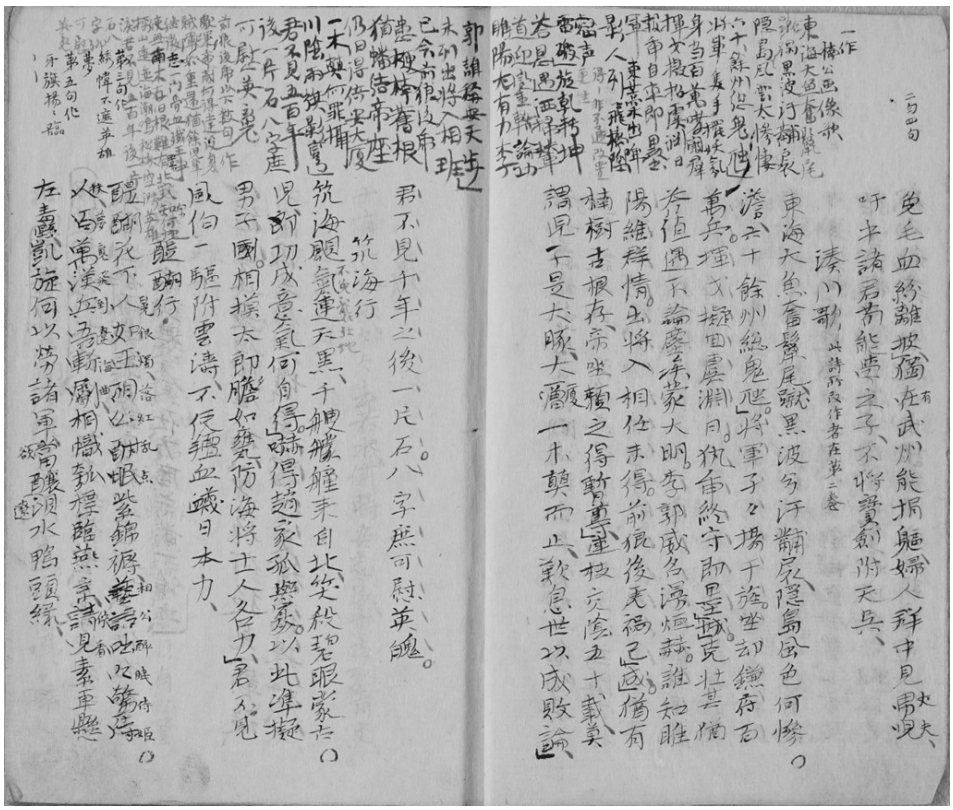

図２　「山陽先生詩稿」（「湊川歌」）

二　「山陽先生詩稿」訳注

1　擬古

東家有佳人
獨棲在高樓
越羅纏其腰
翡翠挿其頭
素手時織錦
錦文何炳彪
織成欲遺誰
四顧無人求
坐見春風至
駘蕩滿芳洲
植々桃李樹
艶々照庭陬
可
對此宜以樂
奚爲自悲愁
良辰與美景
誰與爲攜遊
盈々方二八
歳月去若流
不惜歳月去
容光難永留

擬古
東家に佳人有り
独り棲みて高楼に在り
越羅を其の腰に纏い
翡翠を其の頭に挿す
素手　時に錦を織り
錦文　何ぞ炳彪たる
織り成して誰にか遺らんと欲する
四顧するも人の求むる無し
坐して見る　春風至り
駘蕩として　芳洲に満つるを
植々たる　桃李の樹
艶々として　庭陬を照らす
以て楽しむべし
此れに対して　宜しく以て楽しむべし
奚為れぞ　自ずから悲愁せん
良辰と美景と
誰と与にか携遊を為さん
盈々として方に二八
歳月　去りて流るるが若し
歳月の去るを惜しまざれば
容光　永く留め難し

（欄外・朱批）　古而不陳　　古にして陳からず

【語釈】

〔佳人〕『漢書』外戚伝上・李延年の歌に「北方に佳人有り」とある。〔越羅〕越の国の特産の羅。〔素手〕白く美しい手。「古詩十九首」其十（『文選』巻二十九）に「纖纖として素手を擢んで、札札として機杼（機織りの道具）を弄す」とある。〔炳彪〕明るくかがやくさま。〔欲遺誰〕「古詩十九首」其六に「之を采りて誰にか贈らんと欲する」とある。〔四顧〕四方をふりかえりみる。「古詩十九首」其十一に「四顧するに何ぞ茫茫たる」とある。〔駘蕩〕のびのびとしたさま。謝玄暉の詩「中書省に直す」（『文選』巻三十）に「春物は　方に駘蕩たり」とある。〔庭陬〕庭の隅。〔良辰〕良い日。吉日。〔惜歳月去〕曹丕の詩「清河に於て船を輓くの士新たに婚し妻に別るるに見う一首」（『玉台新詠』巻二）に「但だ歳月の馳するを惜しむ」とある。

【訳】

古詩に擬える

東の家に美人がいて、高楼に一人住んでいた。腰には越の薄絹を纏い、頭には翡翠の髪飾りを挿している。美しい手で時々錦を織ると、錦の模様の何と光り輝くことか。錦を織り上げて誰に贈ろうというのか。周りを見回しても求めてくる人はいない。ただ静かに座ってのんびりとした春風が花の咲き乱れる中洲に吹きわたるのを眺めている。桃や李の樹々

が群生し、艶やかに庭の隅を照らしている。これを前にしては楽しむべきだ。どうして悲しみに沈んだりしようか。このよき時節と美しい景色とを、誰が一緒に楽しんでくれるだろうか。この美しい人も今や十六歳になって、歳月は流れるように過ぎ去っていった。歳月が流れるのを惜しまなければ、その美しい姿を長くとどめることはできない。

（欄外・朱筆）古体ではあるが陳腐ではない。

2　紀遊五首　遊を紀す五首

（欄外）十七八歳時喜明何李諸人作、故有是等詩

十七八歳の時、明の何李諸人の作を喜ぶ。故に是等の詩有り

（1）

澱水蒼茫接海波
海甸風光吾始過
東來地勢迴坡陀
地形漸豁沃田多

澱水　蒼茫として海波に接す
海甸の風光　吾れ始めて過ぐ
東来の地勢　迴かに坡陀たり
地形漸く豁けて　沃田多し

安

山背猶思奠鼎詔
浪華誰誦望烟歌
楠子孤墳獨涕淚
豐家遺業空山河

山背　猶お思う　奠鼎の　詔
浪華　誰か誦せん　望煙の歌
楠子の孤墳に　独り涕淚
豊家の遺業　山河空し

在心

往昔悠々渾若此

心に在りて
往昔　悠々として　渾て此の若し

後來天地更如何　後来　天地　更に如何

（欄外・冒頭二句）

二岳遙臨澱水波
王畿景勝喜初過

二岳遥かに澱水の波に臨み
王畿の景勝　初めて過るを喜ぶ

（欄外・朱批）一結振全勢起　一結振い　全勢起こる

【語釈】

〔紀遊五首〕寛政九年（一七九七）、十八歳で江戸に遊学した時、目にした風物とそこから触発された感慨や史実を歌う。『山陽詩鈔』では巻一に「丁巳東遊」と題して六首を収める。（1）は「丁巳東遊六首」其一の初案。〔何李〕何景明と李夢陽。いずれも中国明代中期の詩人。何景明は信陽（河南省）の人。復古主義を唱えた前七子（李夢陽・何景明・徐禎卿・辺貢・康海・王九思・王廷相の七人。秦漢の文と盛唐の詩を貴んだ）のなかでは、李夢陽とともに指導的立場にあり、李何と並称されたが、のち夢陽は模擬を、景明は創造を主張して対立した。李夢陽は慶陽（陝西省）の人。李東陽（李夢陽らの前七子に先だって復古を目ざした。その詩は格調を尊びながら平明で、歴史故事を歌った古楽府の連作で知られる）の門人としてその影響を受け、彼の主張をより鮮明にした復古主義を提唱した。〔澱水〕淀川の中国風の名称。〔蒼茫〕空・海・平原などのひろびろとして果てしないさま。〔海甸〕海辺の町はずれ。海に接した地方。〔東来〕東の方にやってくる。〔坡陀〕斜めにかたむいて、平らかでないさま。〔沃田〕地味のこえた田地。〔山背〕山城国の古称。〔奠都〕都を定める。ここでは平安遷都を指す。〔望

歌〕仁徳天皇の御歌「高き屋に 登りてみればけぶり立つ 民の竈はにぎはひにけり」（『新古今和歌集』巻七賀歌）を踏まえる。〔楠子孤墳独涕涙〕「楠子」は楠正成。「涕涙」は、なみだを流すこと。東上の途中、三月二十三日に正成の墓を訪れて感慨を催し、古詩を作っていることを指す。そのうちの一首は5の「湊川歌」。〔豊家〕豊臣秀吉。〔往昔〕すぎさった昔。いにしえ。　〔後来〕今からのち。将来。

【訳】

（欄外）十七・八歳の時、明の何景明や李夢陽らの作を好んだ。よってこれらの詩がある。

旅を記す　五首

淀川が青々と広がって海に流れ込んでいる。（芸州から）東に来てみると、土地が遠くまで広がり、起伏しているのがわかる。

幾内の海辺の景色に初めて接した。ここまで来るとしだいに土地は開け、よく肥えた田も多い。山城では今もなお平安遷都の詔（みことのり）のことを思うが、難波では誰が望煙の歌を詠唱していようか。楠公の墓の前に佇むと涙が止まらず、豊臣秀吉の天下統一のあと、山河はがらんとして空しい。昔のことはすべてこのように悠々と過ぎ去る。この世は将来どうなっていくのだろうか。

（欄外・冒頭二句）二つの山岳は遥か彼方から淀川を臨んでいる。

（欄外・朱批）初めて幾内の景勝を目にして喜んでいる。結句が振るうと、全体の勢いがおこる。

（2）

控（ひか）を控え

五十三亭接海東
草津驛路轉飄蓬
湖南草樹春雲碧
幾内峰巒夕日紅
形勝依然此山水
流峙寧移一形勝
興亡已閲幾英雄
分明攻守千年勢
将（まさ）
著論欲追賈誼風

五十三亭（ごじゅうさんてい）　海東（かいとう）に接（せつ）し
草津（くさつ）の駅路（えきろ）　転飄蓬（てんひょうほう）
湖南（こなん）の草樹（そうじゅ）　春雲碧（しゅんうんあお）く
幾内（きない）の峰巒（ほうらん）　夕日（せきじつ）紅（くれない）なり
形勝（けいしょう）　依然（いぜん）たり　此（こ）の山水（さんすい）
流峙（りゅうじ）　寧（ね）んぞ移（うつ）さん一形勝（いちけいしょう）
興亡（こうぼうすで）に閲（けみ）す　幾英雄（いくえいゆう）
分明（ぶんめい）なり　攻守（こうしゅ）　千年（せんねん）の　勢（いきおい）
将（まさ）に追（お）わんとす
著論（ちょろん）　追（お）わんと欲（ほっ）す　賈誼（かぎ）の風（ふう）

（欄外・朱批）六略胚胎　六略胚胎（りくりゃくはいたい）す

【語釈】

「丁巳東遊六首」其三の初案。〔五十三亭〕東海道五十三次。〔控〕～を間近にする。但しこの意味は漢語にはなく、和語の用法。〔海東〕東海。押韻の関係でこの語順になっている。〔転飄蓬〕「蓬」は風に吹かれて転がり飛ぶ植物。流浪して居どころの定まらないたとえ。〔峰巒〕みね。山々。〔形勝〕地勢・風景などのす

ぐれていること。〔流峙〕山河のたたずまい。〔賈誼〕〔前二〇〇～前一六八〕中国、前漢の学者・政治家。洛陽（河南省）の人。文帝に信任されたが、重臣らの反対にあって左遷された。その後ふたたび文帝に召されて文帝の子の梁王の太傅となり、重要な献策を行ったが、三十三歳の若さで病死した。文章家・思想家としても知られ、著書に「過秦論」「新書」などがある。

【訳】

東海を間近にし

東海道は、五十三の宿駅が東海に接していて、その一つである草津の駅を通る道を、私は風に転がる蓬のように彷徨っている。琵琶湖の南には草木は春の雲の下で青々と茂り、畿内の山々は夕陽を受けて紅に染まっている。

この山河のたたずまいは依然として変わらず

この山河は同じ一つの美しさを変えることなく、幾多の英雄の興亡を眺めてきた。長い間繰り広げられてきた英雄たちの攻守の形勢が、私には手に取るように分かるから、賈誼のような著作を、まさに書き起こそうとしている。

（欄外・朱批）『六韜』『三略』の風を萌している。

（3）

思郷何
家人莫問大刀頭

思郷 何ぞ問わん
家人問う莫れ 大刀の頭

悠々

書劍茲生未倦遊
年少吾將事觀國
時平誰復索封侯
天邊層巔連三越
雲裡重關入八州
堪識驩虞有基趾
居然十世舊金甌

悠々として

書劍 茲の生 未だ遊に倦まず
年少うして 吾れ将に観国を事とせんとす
時 平らかにして 誰か復た封侯を索めん
天辺 層巔 三越に連なり
雲裏 重関 八州に入る
識るに堪えたり 驩虞 基趾有るを
居然として 十世旧 金甌

（欄外・朱批）果非遺世之人　果たして遺世の人に非ず

【語釈】

「丁巳東遊六首」其四の初案。〔思郷〕故郷を懐かしく思うこと。望郷。〔大刀頭〕鐶（刀の頭部に付ける輪）を指す。「還」と同音であることから、「還る」を意味する隠語。〔書劍〕書物と剣。むかしの文人が常に携帯したもの。〔茲生〕「此生」と同じ。来世に対してこの世のこと。〔封侯〕領土を与えて諸侯（大名）にする。〔層巔〕重なり合った山のいただき。〔重関〕いくえもの関所。〔驩虞〕「覇者の民は驩虞如たり」（『孟子』尽心章句上）に基づき、覇業をいう。〔基趾（基址）〕もとい。いしずえ。土台。転じて物事の成り立つもと。〔居然〕どっしりとすわって動かないさま。〔金甌〕金甌無欠＝黄金のかめで、少しも欠けたところがない。転じて物事の完全なこと。特に外国の侵略を受けたことのない完全な独立国家のたとえ。

【訳】

どうして故郷に帰ることを問うだろうか　　悠々として

家人よ、どうか帰ることを問わないでほしい。書と剣を携えて私はまだ東遊に飽きて帰ろうという気にはなっていない。年若くして天子の御威光を観ようとしている。この太平の世に誰が諸侯となることなど求めようか。

天にそそり立つ峰々は三越（越前・越中・越後）に連なり、雲の中を幾重にも重なる関所を越えて関東八州に入った。今の覇業にはその土台があることがよくわかる。だからこそじっと動かずに十代にわたって欠けるところがなかったのだ。

（欄外・朱批）果たして世俗を忘れた人ではない。

（4）

鐵馬當年撥戰塵　　鉄馬　当年　戦塵を撥い

壯　　壯図

遙思天慶雄圖新　　遙かに思う　天慶の雄図　新なるを

虎符據險驅群牧　　虎符　険に拠って　群牧を駆り

蛛網經邦籠萬人　　蛛網　邦を経して　万人を籠む

輝　　輝く

戈戟高開將臺色　　戈戟　高く開く　将台の色

節旄遠撫帝鄉春　　節旄　遠く撫す　帝郷の春

吾行亦知蒙恩澤　　吾が行　亦た知る　恩沢を蒙るを

千里山陽如比鄰　　千里山陽　比隣の如し

【語釈】

「丁巳東遊六首」其五の初案。〔鉄馬〕鉄製の冑を着た騎兵。〔当年〕往年。〔天慶雄図新〕「天慶」は平安時代の半ばに平将門が起こした天慶の乱。「雄図」も「壮図」も規模が大きくてりっぱな計画。天慶の乱は平定されたが、武士がおこる契機となった。将門によって始まった武士の世を徳川家康がさらに盤石なものにしたことを指すか。〔虎符〕古代中国で、虎の形につくった銅製の割符。参戦する将軍が兵を徴発する時の証明として天子から与えられた。〔群牧〕多くの地方長官。諸侯のこと。ここでは諸大名をさす。〔蛛網〕くもの巣。〔戈戟〕いずれも打って刺し殺す武器。戈は単枝のもの、戟は双枝（えだ刃）のものをいう。〔将台〕将軍が指揮する台。〔節旄〕昔、中国で、天子から将軍や使節に、任命のしるしとして与えられた旗。ヤクの毛を竿の先につけたもの。〔帝郷〕天帝のみやこ。ここでは江戸をさす。

【訳】

壮大な

甲冑を身に纏い、馬を駆って戦塵を掃った平将門の雄大な野望に、徳川家康が新たな歴史を加えたことに思いを馳せている。将軍の証を掲げ、峻険な八州の地を根拠に諸大名を駆使し、巧緻な法の網をもって国を覆

輝いており

い万人を治めた。その武威は燦然と花開き、その指揮の下において、江戸は春を謳歌しえたのである。

自分の東遊もまたその恩沢を蒙るものであることを知っている。山陽と江戸とが遠く離れていても近所にでも出かけるように安心できるのだから。

（5）

霸気千秋蓊鬱哉　霸気　千秋　蓊鬱なるかな
雲虹遙擁幾樓臺　雲虹　遙かに擁す　幾楼台
女墻出樹雙城聳　女墻　樹を出て　双城聳え
雄岳凌空八朶來　雄岳　空を凌いで　八朶来る
終古草茅迎白月　終古　草茅　白月を迎え
即今闤闠起紅埃　即今　闤闠　紅埃起こる
肩摩轂擊家々給　肩摩轂擊　家々給す
管晏何過諸子才　管晏　何ぞ過ぎん　諸子の才に

【語釈】

〔「丁巳東遊六首」其六の初案〕〔蓊鬱〕香りが強く濃厚であるさま。〔女墻〕城のまわりにめぐらした低い垣。また、低い生垣や塀。ひめがき。〔八朶〕蓮の花。「芙蓉」と呼ばれる富士山のこと。〔終古草茅迎白月〕藤原良経の和歌「行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月影」（『新古今和歌集』秋歌上）を踏まえたものか。〔即今〕現在。〔闤闠〕街市。〔肩摩〕道などが混雑して、肩と肩とがすれ合うこと。〔轂擊〕車馬の通行がきわめて多いこと。人が多く、こみあうこと。〔管晏〕管仲と晏子。管仲は中国春秋時代の斉の政治家。名は夷吾。鮑叔牙の推薦で斉の桓公の宰相となり、富国強兵策をとってその覇業を助けた。晏子（晏嬰）は中国、春秋時代の政治家。斉の三代の王に仕え、名臣として管仲と並び称された。

【訳】

将軍の威光は長い歳月の間満ち溢れて、雲と虹がいくつもの物見台を取り囲んでいる。ひめがきが木々の間から出て本丸と西丸が高く聳え、霊峰富士山は天に聳えて雄壮な姿を見せている。大昔は草むらの上に白いが月が浮かんでいたこの地も今では大きな街となって賑わっている。車馬が多く行き交い、人々は豊かに暮らしている。かの管仲や晏子も江戸幕府を支えた名臣たちの才には勝てないだろう。

3　詠古五首　古を詠ず　五首

（1）

此一首可入前紀遊中　此の一首、前の「遊を紀す」の中に入るべし

百揆簪纓此駿奔　百揆の簪纓　此れ駿奔
觀光亦識帝王尊　観光　亦識る　帝王の尊きを
紫霞低拂紫宸殿　紫霞　低く払う紫宸殿
朱旭高開朱雀門　朱旭　高く開く朱雀門
寶器由來存郟鄏　宝器　由来　郟鄏に存し
土田不必問溫原　土田　必ずしも温原を問わず
西方赤縣終腥羶　西方の赤県　終に腥羶

皇
孰若大猷裕後昆　大猷　後昆を裕にするに孰若ぞ

（欄外）小日本史

【語釈】

「丁巳東遊六首」其二の初案。すなわち寛政九年における東上の途上の作。同年三月二十五日、京都を通った時、御所を見て、天皇への畏敬の念を吐露した作であろう。〔百揆〕もろもろの政治を統べはかる官。百官の長。〔簪纓〕かんざしと冠の紐。転じて、高位高官。また、その人。公卿。〔駿奔〕すみやかに走る。祭祀の際の礼にかなった官吏の動きをいう。〔郟鄏〕周の成王の都。〔土田〕土地。天子が支配する領地の意。　柳宗元の「封建論」に「周の天下を有つや、土田を裂いて之を瓜分す」とある。〔温原〕温と原。周の襄王が晋の文公に与えた領地（『春秋左氏伝』僖公二十五年）。〔赤県〕中国。『史記』孟子荀卿列伝に「中国を名づけて赤県神州と曰う」とある。〔腥羶〕なまぐさいこと。〔大猷〕大きなはかりごと。大きな道。〔皇猷〕天皇の国を治める計画。天子の治世の道。〔裕後昆〕「後昆」はのちの世の人。後人。子孫。後裔。『書経』仲虺之誥の「義を以て事を制し、礼を以て心を制し、裕を後昆に垂れよ」に基づく。

【訳】

百官の臣が正装して奔走している。このような威儀を見るにつけても、天皇の尊さを知ることができる。紫がかった雲が紫宸殿にかかり、赤々とした旭日が朱雀門の上に高く昇っている。三種の神器は、もともと王城にあり、国土は将軍の領地であるとないとに拘らず、あまねく天皇のものである。血腥い争いを繰り返してきた中国と、天皇という大きな道によって子孫を導いている我が国と、いずれが優れているだろうか。

（欄外）小日本史ともいうべきである。

（２）

（欄外）以下四首幷別録八首為詠古十二首　以下の四首幷びに別録八首を詠古十二首と為す。

鞶鑑匆々酬武功
邈矣都兪共亮工
戰塵頻到紫宸宮
竈煬未病太明通

鞶鑑　匆々　武功に酬い
邈たり　都兪　共に亮工
戦塵　頻りに到る紫宸宮
竈煬　未だ病まず　太だ明通

一従
曾縁棣鄂棼人紀
遂使黍離入國風
江左衣冠誰仲父
河陽弓矢幾文公

一たび　従い
曽て棣鄂の人紀を棼すに縁り
遂に黍離をして国風に入らしむ
江左の衣冠　誰か仲父
河陽の弓矢　幾文公

姬姜迭起陳迹
黄雞黑鼠終何在
又見趙韓交競
復使猿犬爭號雄

姬姜迭いに起こり　終に陳迹
黄鶏黒鼠　終に何くにか在らん
又　趙韓見えて　交　競う
復た猿犬をして　争うて　雄を号さしむ

【語釈】

「詠史十二首」其一の初案。〔鞶鑑〕鏡のついた大帯。〔都兪〕都兪吁咈といい、都兪は賛成、吁咈が不賛成の意。君臣の討論審議の意に用いる（『書経』益稷）。〔亮工〕天子を助けて天下の功を立てること（『書経』益稷）。〔黄雞黒鼠〕姦雄を指した語か。ここでは足利氏をいう。〔竈煬〕煬竈で竈に当たること。転じて、一人が竈に当たれば他の者はこれに当たることはおろか、見ることさえできないこと。佞倖の徒が政をほしいままにして君の明を蔽う喩。竈の火を君の明に比して言う（『戦国策』衛策、『韓非子』内儲説上）。〔棣鄂〕棣鄂之情＝仲が良く美しい兄弟の情。棣は庭梅。鄂は花のがくのこと。〔人紀〕人たる者の履むべき筋道。〔黍離〕『詩経』王風の篇名。滅亡した国の都のあとにキビが生い茂って荒れはてた光景。世の栄枯盛衰を嘆く語。〔江左〕揚子江の下流地方。今の江蘇省と浙江省の地。〔河陽〕春秋時代、晋の文公が周の襄王を呼びつけて狩をさせた土地（『春秋左氏伝』僖公二十八年）。〔弓矢〕晋の文公が周の襄王より与えられた褒美の品。この時、諸侯の長に任命された（『春秋左氏伝』僖公二十八年）。〔姫姜〕晋の王は姫姓。斉の王は姜姓。源平二氏に擬えている。〔迭起〕かわるがわる現れる。『日本外史』楠氏論纂に北条氏・足利氏を指して「姦雄迭いに起こる」とある。〔黄雞黒鼠〕姦雄を指した語か。ここでは足利氏をいう。

【訳】

（保元の乱で）論功恩賞が軽率に行われたため　紫宸殿にまで戦塵が及んでしまった。

遙か昔は忠実で賢明な臣がいたため、佞臣の災いも未だ朝廷を蝕むに至っていなかった。かつて（崇徳・後白河の）兄弟の不和が争乱を招いたために、そのまま天皇の威勢は地に堕ちてしまった。管仲に匹敵する（大江広元の）ような人物が現われ、（足利義満や豊臣秀吉のような）天皇の行幸を受ける人物が何人も現れた。姦雄たちもついにはいなくなってしまい、再び群雄が割拠する時代となってしまった。

源平の争乱も遠い昔の話となり

（3）

平城讎復亦徒爲
業就磨崖未勒碑
袞職豈無周仲甫
簧言獨患晋驪姬

平城の讎復　亦徒為
業就りて　摩崖　未だ碑を勒さず
袞職　豈に無からんや　周の仲甫
簧言　独り患う　晋の驪姫

叢（壁）

蠶桑半壁開天日

叢（壁）
蠶桑　半壁　天を開くの日

三

劍璽五朝離國時
不憾陳生謬順逆

三
劍璽　五朝　国を離るるの時
憾みず　陳生の順逆を謬るを

夙

春秋猶有彦威知

夙に
春秋　猶お　彦威の知る有り

（欄外）　指正統記　　正統記を指す

【語釈】

「詠史十二首」其一の初案。〔平城〕奈良。ここでは天皇が自ら政治を行っていた奈良時代のこと。〔讎復〕「復讎」に同じ。平仄の関係でこの語順となった。こ

こでは建武の新政（後醍醐天皇による天皇親政の復活）を指す。〔徒為〕無駄なしわざ。建武の新政が二年で終わったことをいう。〔袞職〕天子を補佐する大臣宰相の職。『詩経』大雅・烝民に「袞職に闕有らば　維れ仲山甫之を補う」とあるのに拠る。〔仲甫〕仲山甫のこと。仲山甫は中国周代の政治家。樊侯という。魯の献公の子で、周の宣王によって周王朝中興がなされた時の賢臣。後醍醐天皇の側近藤原藤房になぞらえる。〔簧言〕讒言。「簧」は笛の舌。「蛇蛇たる碩言は口より出ず。巧言　簧の如く　顔之れ厚し」（『詩経』小雅・巧言）。〔驪姫〕晋の献公の寵姫。後宮の寵臣たちと共に讒言を行い、太子の申生に代えて我が子を立てようと計った。ここでは後醍醐天皇の寵愛を受け、讒言によって皇子の護良親王を陥れた藤原廉子に擬える。〔蠶叢〕伝説上の太古の蜀王の名。転じて蜀の別名。ここでは南朝のあった吉野を指す。〔半壁〕「半璧」の誤写か。「璧」は皇位。それが南朝と北朝に分裂しているため「半」という。〔開天〕創始する。〔剣璽〕天子のしるしである剣と玉。〔陳生〕陳寿のこと。陳寿が正史『三国志』で魏を正統としたのは誤りで、蜀を正統とすべきだったとする。ここで山陽は、南朝が正統であると暗に言っている。〔彦威〕東晋の歴史家・習鑿歯の字。著書に『漢晋春秋』があり、蜀を正統とした。南朝を正統として『神皇正統記』を著した北畠親房になぞらえる。

【訳】

武家に復讐を果たしたともいうべき後醍醐天皇の新政も、その業績を碑に刻んで讃える前に終わってしまった。天皇を輔弼する（周の仲山甫のような）忠臣がいなかったわけではない。三位局藤原廉子の讒言のために（藤原藤房の）諫言が聞き入れられなかったのは是非もないことであった。その結果、吉野に南朝を立てることになり、後醍醐・後村上・後亀山の三代にわたって剣璽を立てなければいけなくなった。多くの人々は順逆を誤り、北朝を正統としているが、早くからどちらが正統かを正しく理解している人物（北畠親房）がいる。

（欄外）（北畠親房の『神皇正統記』を指していう。

（4）

白旄披拂九重雲　白旄　披き払う九　重の雲
始見武人爲大君　始めて見る　武人の大君と為るを
脩怨能除僧相國　怨を脩めて　能く除く僧相国
貽謀豈料尼將軍　謀を貽して　豈に料らんや尼将軍

険　濟
五蛇求穴艱難定　五蛇　穴を求めて艱難定まり
威　柄
三馬同槽封域分　三馬　槽を同じうして　封域分かる
休謂荀生忘漢室　謂うを休めよ　荀生　漢室を忘ると
削平誰得競元勲　削平　誰か元勲を競うを得ん

【語釈】

「詠史十二首」其三の初案。〔白旗〕源氏の旗印。〔九重〕①いくえにも重なること。「錦衣九重」　②宮中。宮廷。ここのえ。〔威柄〕人を恐れさせ服従させる力と、権力。〔五蛇〕春秋時代、晋の文公（重耳）に従った五人の臣下（子偃・

趙衰・魏武子・司空季子・介子推）。文公は即位するまでに十九年に及ぶ亡命の苦難があった。ここでは伊豆に流されて二十年間流人の生活を送った源頼朝の臣下たちを指す。〔三馬同槽〕魏の曹操が三匹の馬が同じ槽（飼葉桶）でまぐさを食べている夢を見て不吉に思った故事（『晋書』宣帝紀）。三馬は、魏で曹操から権力を奪っていった司馬氏の三人のことであるが、ここでは頼朝の死後、幕府の実権が北条氏に移っていったことをいう。〔荀生〕荀彧。はじめ後漢に仕え、後、魏の曹操の謀臣となる。ここでは、はじめ源頼朝に仕えながら、頼朝の死後は北条氏の参謀となって大功があった大江広元を指す。〔削平〕敵の勢いを弱めて平定する。〔元勲〕国家に尽くした大きな功績。

【訳】

白旗を翻し、平氏を滅ぼして宮廷にかかる暗雲を払い、初めて征夷大将軍となったのが源頼朝であった。怨みを晴らして平清盛を除くことができたが、子孫に政権を残したのに北条政子に持って行かれるとはどうして予想できよう。家臣らは彼のもとに集まって困難ののちに天下を平定したが、北条氏三代（時政・義時・泰時）に権力を奪われてしまった。大江広元が（荀彧のように）朝廷の恩を忘れたなどといってはいけない。誰が広元の天下平定への功績に比肩することなどできようか。

（5）

還飽颺　　飽颺に還る

一旦倒戈卜興亡　　一旦　戈を倒し　興亡を卜す

分明後虎與前狼　　分明なり　後虎と前狼と

袁

曹表跋扈終傾漢　　曹表の跋扈　終に漢を傾け

遂害　　遂に害す

朱李爭衡豈爲唐　　朱李の争衡　豈に唐の為ならんや

歸　　帰す

要路長建三管領　　要路　長く建つ　三管領

中原暫見兩天王　　中原　暫く見る　両天王

可知繁實披枝幹　　知るべし　繁実　枝幹を披るを

大樹何堪棲鳳凰　　大樹　何ぞ鳳凰の棲みたるに堪えん

【語釈】

「詠史十二首」其四の初案。〔飽颺〕十分盗んで逃げる。〔後虎前狼〕「前虎後狼」とも。災難がしきりに来ることをいう。〔曹袁〕曹操と袁紹。互いに覇を争い、漢の衰亡を招いた。ここでは足利氏と新田氏を指す。〔朱李〕朱全忠と李克用。朱全忠（八五二～九一二）は、中国五代後梁の初代皇帝。黄巣の乱に参加し、のち唐に降り節度使となった。九〇七年、唐を滅ぼし汴京（開封）に即位したが、次子の友珪に殺された。李克用（八五六～九〇八）は、中国唐末の武将。突厥沙陀部の出身。後唐の建国者李存勗の父で、太祖と追号された。黄巣の乱を鎮圧し、河北を制して朱全忠と激しく争ったが病没。独眼竜の異名をとった。ここでは足利尊氏と新田義貞になぞらえる。〔繁實披枝幹〕『史記』范睢列伝に「木実繁き者は其の枝を披り、其の枝を披る者は其の心を傷く」とある。臣が強くなると主家は衰えるの意。〔大樹〕将軍の意。後漢の将軍馮異は、他の将軍たちが手柄の話を始めると、大きな樹の下に移動して自身の功績を語ろうとしなかったという。

「馮異大樹」は、謙虚で慕われるような人格のたとえ。

【訳】

恩賞を盗んでから叛旗を翻した

足利尊氏は、一旦は戈を収めていたが、反乱の機会を窺っていた。これは、「前門に虎を防いで後門に狼を進む」の喩えどおりであった。足利

争ったことが皇室を危うくし、

と新田がのさばって皇室の力を弱め、彼らが覇権を争うことはどうしてついには衰微を招いたのである

皇室のためになるだろうか。その足利氏も実権を尽く三管領（斯波・細川・畠山）に奪われ、ついには応仁の乱が起こり、一時は二人の王（山名・細川）が覇を競うような有様であった。あまりに臣下を優遇し、領土を与えすぎたため、「繁実枝を披る」の言葉どおり、足利氏は衰えてしまった。これでは大樹（将軍）とは名ばかりで、（聖王の世に現れるという鳳凰が棲むこともなく）瑞祥が現われることなどあろうか。

4　一谷歌

播之首
攝之尾
吾視其地何雄偉
山勢北來迥海（壖）濡
松柏露根亂蘆葦

播の首
摂の尾
吾 其の地を視るに何ぞ雄偉なる
山勢 北より来りて 海壖に迥い
松柏 根を露わして蘆葦乱る

一谷の歌

怒潮淘沙出白骨
啼小鬼兮哭大鬼
聞説平氏曾此鏃赤斿
蜚蠊爲城澎湃爲溝
左控王畿右甸服
舊物自期唾手收
無柰東人有機智

怒潮 沙を淘いて白骨を出し
小鬼啼き 大鬼哭す
聞説ならく 平氏曽て此に赤斿を鏃らすと
蜚蠊を城と為し 澎湃を溝と為す
左に王畿を控え 右に甸服
旧物自ら期す 手に唾して収めんと
奈ともする無し 東人 機智有りて

作何若

要害早已被耽視
九郎一身渾是膽
伏旗仆鼓出不意
蜀道雖難不用氈
懸崖絶壁如平地
組練劃山訝懸瀑
蹄閒三尋真是鹿
秦宮殿宇從一炬
晉人爭舟指可掬
桓伊弄笛終貽禽
劉琨嘯歌亦遭戮
人勝敗有機少年知
繪畫徒傳世上兒
一自貂蟬出介冑

何若と作さん

要害早く已に耽視せらるを
九郎の一身 渾て是れ胆
旗を伏せ 鼓を仆して不意に出ず
蜀道難しと雖も氈を用いず
懸崖絶壁 平地の如し
組練 山を画して懸瀑かと訝る
蹄間三尋 真に是れ鹿
秦宮の殿宇 一炬に従い
晉人 舟を争いて指掬すべし
桓伊 笛を弄んで終に禽を貽り
劉琨 嘯歌して亦戮に遭う
人の知る少なし
勝敗機有り 少年知る
絵画徒らに 世上の児に伝う
一たび貂蟬 介冑に出でし自り

上下文恬又武熙
豈知養虎自遺患

既
羽翼已成猶守雌
敢忘越人殺其父
白旄一出誰能支
宛如翡翠遇飢鷹
不免毛血紛離披

有
獨在武州能捐軀

丈夫
婦人群中見男兒
吁乎諸君苟能學之子
不將寶劍附天呉

（欄外）起手不凡

上下文恬　又武熙
豈に知らんや　虎を養いて自ら患いを
遺せしを

既に
羽翼已に成りて　猶お雌を守る
敢て忘れんや　越人の其の父を殺せしを
白旄一たび出でて　誰か能く支えん
宛も翡翠の飢鷹に遇うが如し
免れず　毛血の紛として離披するを

有り
独り武州の能く軀を捐つる在り

丈夫
婦人群中　男児を見る
吁乎　諸君　苟も能く之の子を学ばば
宝剣を将って天呉に附せず

起手凡ならず。

【語釈】

「過一谷懐平源興亡事作歌」（『山陽詩鈔』巻一所収）の初案。〔雄偉〕たくましくすぐれていること。〔海壖〕海岸。〔蘆葦〕植物のアシ。水辺に自生する。〔赤斿〕赤旗。平氏の旗である。斿は、旗の垂れさがった部分。ふきながし。〔蜚蠊〕険しい山。山の巓。〔澎湃〕水がみなぎり逆巻くさま。〔甸服〕古代中国で、王城を中心として五つに分けた地（五服）の一つ。周以前は、王城の周囲各五百里以内（千里四方）の地をいう。〔旧物〕祖先が遺したもの。〔耽視〕うかがい視る。〔九郎〕源義経。源義朝の九男で、源九郎と呼ばれた。〔蜀道之難不用氈〕李白の詩「蜀道難」に「蜀道の難きは青天に上るより難し」とあり、また、魏の鄧艾が蜀を攻めた際に毛氈に身を包み、険峻な蜀道を転がり下りたという逸話（『三国志』魏書・鄧艾伝）をふまえたもの。〔組練〕組甲と被練（絹で綴ったよろい）。転じて、よろい。〔蹄間三尋〕優れた馬が一蹴りで三尋の高さまで跳ぶこと。一尋は一八〇センチ。『史記』張儀列伝に「蹄間三尋にして騰る者、勝げて数うべからず」とある。〔晋人争舟指可掬〕『春秋左氏伝』の宣公十二年、邲の戦いで楚に敗れた晋軍が舟を争い、後から乗ろうとする者の指が切り落とされた様子を「舟中の指掬すべし」と表現したのをふまえている。〔桓伊〕東晋の人。笛の名手。同じく笛の名手である平敦盛に擬えている。〔貽禽〕首級を献じる。殺されることをいう。ここでは平敦盛が一の谷の合戦で熊谷直実に討たれたことを指す。〔劉琨〕　西晋の人。詩人として知られる。段匹磾に殺された。和歌に秀でた平忠度（一の谷の合戦で阿部忠澄に討たれた）に擬えたもの。〔貂蟬〕貂の尾と蟬の羽を用いた冠の飾り、またその冠。冠をつける人、高位高官を意味する。〔文恬武熙〕文官も武官も安逸にふけって世をかえりみず、災いが兆すのに気づかないこと。〔羽翼已成〕「羽翼」は助けること。また、助ける人。補佐。『史記』留侯世家に「我（漢の高祖）之（太子）を易えんと欲すれども、彼の四人（東園公・綺里季・夏黄公・角里先生）之を輔け、羽翼已に成り、動かし難し」とあるのに拠る。〔守雌〕ここでは「雌伏」と同義。実力を養いながら活躍の機会をじっと待つこと。『老子』第二十八章に、「其の雄を知り、其の雌を守れば、天下の谿と為る」（男性的な剛強なあり方を知って、女性的な柔弱な立場を守っていく

と世の人が慕いよる谷間になれる）とあるのに拠る。〔敢忘越人殺其父〕越王句踐との戦いで負傷した呉王闔廬が死に際に子の夫差に語った言葉。「闔廬、太子夫差を立てしめ、謂いて曰く、爾、而は句踐が汝の父を殺せるを忘れんか、と」（『史記』呉太伯世家）に拠る。同じく父を殺された頼朝に擬える。〔養虎〕後日の災いとなる種を残すこと。〔白旄〕源氏の白旗。〔毛血〕毛と血。血まみれの羽根の意か。〔離披〕羽が舞い落ちるさま。〔武州〕平知章を指す。〔不将宝剣附天呉〕壇ノ浦の戦いで平氏が敗れた時、二位尼（平清盛の未亡人時子）が安徳天皇を抱いて三種の神器とともに海に沈んだことを踏まえる。「天呉」は水に住む怪物の名。人面で八首八足八尾という。

【訳】

一谷の歌

播磨の東、摂津の西。この一の谷の地を見るとその地勢の何と雄壮なことか。山は北から走って海岸に向かい、山肌には松や檜が根を露わにし、海辺には蘆や葦が茂っている。打ち寄せる波が砂を洗って白骨が現れ、老若多くの武者たちの霊魂が泣き叫ぶ声が聞こえてくる。聞くところによると、かつてここでは平氏の軍勢が赤旗を翻して群がり、険しい山を城郭とし、波が逆巻く海を濠とし、左に王城の地を、右には中国地方を控えて、旧来の覇業を回復しようしていた。ところが東国の武者に

如何ともしがたい状態に陥った

も機智を持つ者がおり、否応なくこの要害はいち早く監視されてしまった。源九郎義経は全身これ胆力ともいうべき男で、旗や鼓を伏せて不意打ちに出た。（蜀道に匹敵する 鵯 越の難所も）魏の鄧艾のように毛氈を使って転がり下りることなく、険しい絶壁のような谷をあたかも平地のように駆け下りた。鎧を纏って山を画すように一斉に駆け下りる様は瀑布と見まがうばかりで、山を駆け下る駿馬はまさに鹿のようであった。こうして（一本の松明で焼け落ちた秦の阿房宮のように）福原の要害は灰燼に帰してしまった。秦の兵士は先を争って舟に乗り込もうとしてしがみついた者の切り落された指が両手で掬えるほど多かったというが、平氏の人々も我先に舟で逃れようとした。笛の名手であった平敦盛も熊谷直実に首級を上げられ、歌を能くした平忠度も討たれてしまった。戦の勝

そのことを知る人はまれで

敗には機（原因となるきっかけ）というものがあり、若者は知っているが、いたずらにこの合戦の様子を描いては子供たちに伝えているだけである。平氏が鎧を脱いで衣冠束帯を身に付け、公卿になってからは、文官も武官も遊楽に耽って世をかえりみることなく、源頼朝を生かしておくことが自分たちの災いとなることに気がつかなかった。頼朝は力を養って雌伏の時を待っていた。父を殺された頼朝は復讐することを忘れていなかったのだ。ひとたび源氏の白旗が翻ると、これを止め得る者はなく、あたかも翡翠が飢えた鷹に遭遇したかのように血まみれになるという目に遭ったのは不思議なことではなかった。只一人、平知章が父知盛の代

丈夫

わりに討ち死にしたのは、婦人の群れの中に真の男児を見るというべきものであった。ああ、平氏の人々が知章を見習っていたなら、草薙の剣を海神のものにしてしまうようなことにはならなかっただろう。

（欄外）書き出しには非凡なものがある。

5　湊川歌

此詩所改作者在第二巻　　此の詩改作する所は第二巻に在り

東海大魚奮鬣尾
蹴黒波兮汙黼扆
隱島風色何慘澹
六十餘州總鬼虺
將軍子々揚干旌
坐却鎌府百萬兵
揮戈擬回虞淵日
執函終守卽墨城
克壯其猶答値遇
不論塵埃蒙大明
李郭威名漫烜赫
誰知睢陽維群情
出將入相任未得
前狼後虎禍已成
猶有楠樹古根存
帝坐賴之得暫尊
連枝交陰五十載
莫謂兒子是犬豚

東海の大魚　鬣尾を奮い
黒波を蹴り　黼扆を汚す
隱島の風色　何ぞ慘澹たる
六十余州　総て鬼虺
将軍子々として　干旌を揚げ
坐して却く　鎌府　百万の兵
戈を揮い　回さんと擬す　虞淵の日
函を執り　終に守る即墨の城
克く其の　猶　を壮んにして値遇に答え
塵埃の大明を蒙うを論ぜず
李郭の威名　漫りに烜赫たり
誰か知らん　睢陽　群情を維ぐを
出でては将　入りては相　なるも　任　未だ得ず
前狼後虎　禍　已に成る
猶お　楠樹有りて　古根を存し
帝坐　之を頼り　暫く尊きを得たり
連枝の交陰　五十載
謂う莫かれ　児子は是れ犬豚なりと

厦

大層一木顛而止
歎息世以成敗論
君不見千年之後一片石
八字庶可慰英魄

厦か

大層　一木　顛れて止む
歎息す　世　成敗を以て論ずるを
君見ずや　千年の後一片の石
八字　庶わくは　英魄を慰むべし

【語釈】

「謁楠河州墳有作」（『山陽詩鈔』巻一所収）の初案。〔東海大魚〕『太平記』巻六に、北条高時の一味を指して「東魚来って四海を呑む」という。〔黼扆〕斧の形をかいた赤い絹地の屏風。天子の御座のうしろに立てたもの。〔子々〕高くそびえるさま。『詩経』鄘風「干旄」に基づく語。〔干旄〕竿の上に付けた旗。〔鬼虺〕鬼と蛇。悪逆の者の意。〔虞淵〕中国の伝説上の場所。太陽の没するところとされる。〔克壯其猶〕『詩経』小雅「采芑」に基づく語。〔値遇〕優れた君主に出会って実力を認められること。〔李郭〕李光弼と郭子儀。いずれも唐代の武将。李光弼（七〇八～七六四）は、契丹の後裔で騎射軍略にすぐれ，天宝 十四年（七五五）年に安史の乱が起ると唐朝に重用され，乱の鎮圧に尽力した。中興の戦功第一とうたわれ、臨淮王に封じられた。郭子儀（六九七～七八一）は、安史の乱を平定した。その後、一時排斥されるが再び登用され、吐蕃の侵入を退けた。最高官の太尉、中書令に任ぜられ、汾陽王に封ぜられた。〔烜赫〕名声を高める．名声が鳴り響くこと。〔睢陽〕県の名。その故城。今の河南省・商邱県の南にあり、唐の張巡・許遠がここを守って安禄山に抵抗した。　〔出将入相〕朝廷の外に出れば将軍として、朝廷の中に入れば宰相として力を発揮すること。学問と武術の両方の才能があることをいう。〔交陰〕木の枝が互いに陰を交える。ここで

は朝廷が南朝と北朝に分かれること。〔大廈一木顛而止〕「大廈」は大きな家。豪壮な建物。『文中子』事君篇に「大廈将に顛れんとす。一木の支うる所に非ざるなり」とある。

【訳】

東海の大魚(北条軍)が鰭や尾を振り立て、黒い荒波を蹴立てて押し寄せるような勢いで(関東から攻め寄せて)帝座を汚し、後醍醐天皇を隠岐島に流した。隠岐島の風雲は何とも傷ましく、日本六十六州は総て賊のものとなった。

この時、将軍(楠木正成)は天皇に呼応し、高々と旗を掲げ、いながらにして鎌倉方百万の兵を退けた。戈を揮って没もうとする太陽を招き返そうとし、(斉の田単が即墨で兵士とともに城を築いたように)赤坂・千早城を築いて戦った。正成は大いに謀略を巡らして天皇の重用に応え、塵や埃が太陽を覆い隠すのを問題にしなかった。足利尊氏と新田義貞(李光弼と郭子儀に擬える)の名声はこれといった理由もなく高いが、誰が知ろう、赤坂・千早城(睢陽城に擬える)を守った正成が多くの人々の心を鼓舞し、繋いだことを。文武に才能を発揮した正成も正当な任務を得ることが出来ずに、前門の虎(北条氏)を防いだかと思うと後門の狼(足利氏)が攻めてくるという禍が起こった。

楠木氏はなお健在であって、天皇は正成を頼り、しばらくは帝位を守ることができた。ついには南北朝に分かれる時代が五十年も続くことになったが、正成の子供たちを才智のない愚か者だと言ってはいけない。巨大な建物も一本の木で支えることはできず、ついには崩れる。後世の人々が成功や失敗のみによって英雄を論じるのを私は歎く。

君は見るだろう。千年の後もなお建っている一片の石を。そこに刻まれた(「嗚呼忠臣楠子之墓」の)八字がどうか英雄の霊をなぐさめてほしい。

(欄外)

一作

楠公畫像歌

東海大魚奮鬣尾
蹴蹋黑波汗黼扆
隱島風雲太慘悽
六十餘州總鬼虺
將軍隻手擺妖氣
身當百萬哮闞群
揮戈擬招虞淵日
(執)
報函自率即墨軍
東藁出陴影人列
飛橋陞壑声雷磻
旋乾轉坤答恩遇
洒掃輦道迎鑾輅
論功睢陽尤有力
李郭誰稱安天歩」
未列出將入相班
已今前狼後虎患

一に作る

楠公画像の歌

東海の大魚　鬣尾を奮い
黒波を蹴り　黼扆を汚す
隠島の風色　太だ惨澹
六十余州　総て鬼虺
将軍　隻手もて妖気を擺い
身は当る　百万哮闞の群
戈を揮い　招かんと擬す　虞淵の日
(執り)
函を報じ　自ら率いる即墨の軍
東藁　陴を出て影は人列
飛橋　壑を陞り　声は雷磻
乾を旋し　坤を転じて　恩遇に答え
輦道を洒掃して　鑾輅を迎う
功を論ずれば　睢陽　尤も　力有り
李郭　誰か称せん　天歩を安んずと
未だ　将より出でて　相に入るの班に列せざるに
已に今　前狼後虎の患

楩楠舊根猶蟠結
帝座仍舊得倚安
大廈一木顛何罪
攝川陰雨旗影彎
君不見五百年後一片石
八字庶可慰英魄

楩楠の旧根　猶お　蟠結
帝座　旧に仍り　倚安するを得たり
大廈　一木　顛るるは何の罪ぞ
摂川の陰雨　旗影彎がる
君見ずや　五百年の後　一片の石
八字庶わくは英魄を慰むべし

【語釈】

〔飛橋〕高い所に架かった橋。ここでは正成の築いた千早城を攻めるために賊軍が造った雲梯を指す。〔哮闘群〕吠え叫ぶ猛獣の群れ。賊軍を指す。〔報函〕「報」は「執」の誤写か。ここでは「執」として解釈する。〔雷磕〕「磕」は雷の轟き響く音。〔恩遇〕天子のめぐみ。〔輦道〕天子の車の通る道。〔洒掃〕水をまき、箒で掃くこと。〔鑾輅〕天子の乗る馬車。〔天歩〕国の情勢。〔楩楠〕楠木氏のこと。「楩」はクスノキに似た木。〔蟠結〕わだかまりむすぼれる。〔陰雨〕しとしと降る陰気な雨。〔旗影彎〕楠木氏がついには滅んだことを指すか。

【訳】

東海の大魚（北条軍）が鰭や尾を振り立て、黒い荒波を蹴立てて押し寄せるような勢いで（関東から攻め寄せて）帝座を汚し、後醍醐天皇を隠岐島に流した。隠岐島の風雲ははなはだ傷ましく、日本六十六州は総て賊のものとなった。

将軍たちは天皇に呼応し、反旗を翻した。この時、楠木正成は一身で怪しい気を払いのけ、鎌倉方百万の賊軍に立ち向かった。戈を揮って没もうとする太陽を招き返そうとして、（斉の田単が即墨で兵士とともに城を築いて戦ったように）赤坂・千早城を築き、軍勢を率いて戦った。正成は藁人形を押し立てて人の列のように見せかけ、雲梯を造り、谷を登って攻めようとする賊兵は梯を焼き払われて叫びながら落ちていった。

こうして正成は、長い年月を耐え忍ばれた天皇の厚遇に応え、天皇の通られる道を掃き清め、その輿をお迎えした。最も論功行賞に与かるべきは正成であって、誰が足利尊氏と新田義貞（李光弼と郭子儀に擬える）が天下を安定させたというのか。

文武に才能を発揮した正成も、正当な任務を得ることが出来ないうちに、前門の虎（北条氏）を防いだかと思うと後門の狼（足利氏）が攻めてくるという禍が起こった。楠木氏はなお健在で、天皇は以前のように正成を頼り、帝位を守ることができた。巨大な建物をささえた一本の木が倒れたのは誰の罪だというのか。湊川に降る陰鬱な雨に軍旗の影は靡き伏している。

君は見るだろう、五百年後にこの一片の石を。そこに刻まれた（「嗚呼忠臣楠子之墓」の）八字がどうか英雄の霊を慰めてほしい。

（欄外・朱筆）

前狼後虎以下數句一作

獻策帝閽何得達
設身賊陣不重還
猶餘兒輩繼微志
一門骨血殲王事
使無南木存舊根
難有北闕知何地
攝山逶迤海潮鳴
松楸空濺英雄淚

「前狼後虎」以下の数句、一に
「策を帝閽に献じて　何ぞ達するを得ん
身を賊陣に設けて　重ねて還らず
猶お　児輩を余して微志を継がしめ
一門の骨血　王事に殲す
南木をして旧根を存する無からしめば
北闕の何れの地なるかを知ること有り難し
摂山　逶迤として　海潮鳴り
松楸　空しく英雄の涙を濺ぐ

若不見五百年後一片石　　若　見ずや　五百年の後　一片の石
八字聊慰可英□　　八字聊か英□を慰むべし」に作る

【語釈】
〔帝闔〕天子の宮門。〔逶迤〕うねうねと曲がる。〔松楸〕マツとヒサギ。墓地に植える木。転じて墓地のこと。

【訳】
前狼後虎以下の数句は、ある本では以下のようになっている。
策を天子の宮門に献じたが、どうして栄達を得られようか。身を投げ出して敵陣に攻め込み、二度と帰らなかった。なお子供らをとどめて我が志を継がせ、一門の者の骨も血も王事のために尽くした。楠木氏が朝廷の正統を保ってくれることがなかったら、朝廷がどのような地にあるかを知ることは難しい。摂州の山はうねうねと曲がり、波の音が近くに聞こえ、墓地では英雄が無念の涙を濺ぐばかりだ。君は見ただろう、五百年の後、一片の石に刻まれた八字がわずかに英雄の魂を慰めているのを。

（欄外）
第三句作　　第三句
綉幃不遮英雄夢　　「綉幃　遮らず英雄の夢」に作る。
第五句作　　第五句
牙旗揚々臨　　「牙旗揚々として臨む」に作る。

【語釈】
〔綉幃〕綉は綿の一片。繡と同じく用いる。繡は、縫い取り。縫い取りした布。にしき。幃は、一重の帳（単帳）。〔牙旗〕大将軍の旗。

【訳】
第三句は、「綉幃　遮らず英雄の夢」（錦繡の帳も英雄の夢を遮らない）に作る。
第五句は、「牙旗揚々として臨む」（大将軍の旗は得意げにこれに臨んでいる）に作る。

以上、今回は、1．擬古（未詳）　2．紀遊五首（寛政九年）　3．詠古五首（寛政九年）　4．一谷歌（寛政九年）　5．湊川歌（寛政九年）の十三首について訳注を行った。

執　筆　者

石川　良枝　　広島県立文書館文書等整理従事員
石橋健太郎　　広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
伊藤　大輔　　広島県教育委員会事務局管理部文化財課主任
岡野　将士　　広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
木村　信幸　　広島県立歴史博物館学芸課長兼草戸千軒町遺跡研究所長
久下　　実　　広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
花本　哲志　　広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館主任学芸員
湯谷　祐三　　愛知県立大学非常勤講師
廣森美枝子　　小牧市古文書調査会会員
尾崎　光伸　　広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所主任学芸員

広　島　県　立　歴　史　博　物　館　　研　究　紀　要　第24号

BULLETIN of the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY Vol.24

発　行　日　　令和３年９月 30 日

編集・発行　　広島県立歴史博物館
Hiroshima Prefectural Museum of History
〒720-0067　広島県福山市西町 2-4-1
2-4-1 Nishi-machi Fukuyama City Hiroshima Prefecture
720-0067,Japan
Tel.084-931-2513　Fax.084-931-2514

印　　刷　　株式会社カオス